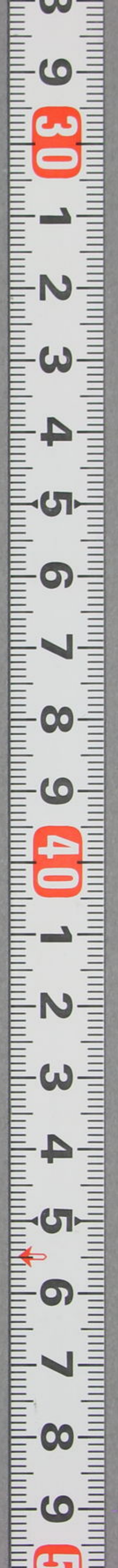


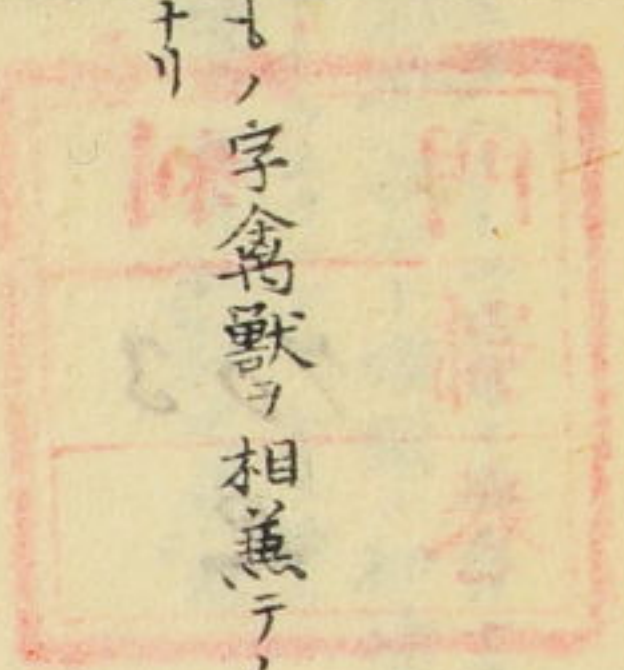
標注七部集

坤

文庫
11

^ 5
703
2





も、字禽獸ヲ相兼テ、歎息ナリ

鮒 正字鱒魚也、ホリト云

廣澤浴外ナリ、治太郎諸説アリト詩經名物并解ニ、鴻ニ種ト云リ

ぬきハ欺クハナリ
ぢろろーヤハ神無月ーと云
浮おろくをしのこの名は
あしきものゝる古歌をフナ
マリ

猿蓑集卷之一

冬

初ハれ猿も小蓑をほけけし
 阿れきけと時を暮らねの鐘を
 時百もやさむらねるも鈔ふれ
 幾人う時をかけぬく勢田の橋
 鐘物の松振もつるしれれれ
 廣澤やけりるるるる泊を即
 舟人よねるをさし時をる
 伊勢の境より
 ぢろろーヤをさむの隣りーと云
 芭蕉
 其角
 子那
 大草
 正房
 史邦
 尚白
 曾白

竹田山城より人丸ノッダニ
山城の小幡のすまゝのいあはれ
かろよるやくををのり

劉元叔カ北斗星前横旅催
換骨ナリ

徒和言らん不徳の歌終り
舟の中へははれとてしナリ
御時

ささるる如魚木つむおのさむり
 るかりて竹田の星やけりーと云
 舟の中へははれとてしナリ
 舟田の禪歌りふるーと云れれれ
 いそがし沖の時をのさ帆り帆
 初雲よりや北斗の星をさ
 ぢろろも暮るりのなまをさおれ
 渡るる
 初雲よりや北斗の星をさ
 阿れむそれもさぬし延きれ
 舟の中へははれとてしナリ
 凡兆
 乙巳
 羽衣
 昌房
 左馬
 石炭
 那水
 其角
 同
 凡兆

松の世も又松を...
又夫木集...
らく松や...
すのうを...

古文前集ニ負交行ノ文アリ

巴千身のわねて渦巻云

茶湯とてつめを...
炭竈ふも灰の...
任つりぬ旅の...
おとらや巨...
つちのふ家も...
木免やおの...
みくつらん...
中一...
浦丸や巴...
あら...
史邦

史邦
文子
子那
元地
木島
文子
政通
且葉
杉風
其角
其角
史邦

矢田越前
新古今...
まて...
定く...

余吾ハ江州伊香郡

原本柴の...
師曰此木...
改

松の...
背門口の...
いら...
矢田の...
幾士の...
あ...
多...
お...
襟...
此木...
野尻の...

史邦
文子
子那
元地
木島
文子
政通
且葉
杉風
其角
其角
史邦

紙象之記芭蕉文集三ノリ
余寂衣ナリ大被田象

元禄二年曾良奥州行脚
供養此吟アリ

膝突ハ徒然草流士又五郎ハ
段ニ有リ半々ノ類ナリ

足やうそ一松人等一石部山 大津尼 智力

前り結う古き象を阿ふらる記

阿の思ふ

首出りて初雪をくも中此象

比戸

歌竹戸之象

吾自に我子の何とぞ紙象

常良

魚のわけ物やまをまを水に

採花

志つゝ志紙枚理もおもも網信

丈草

清白ゆき候寸

縁 実よか〜〜〜ある象うれ

史和

搜桐の葉め露もねお花うね

聖童

家持ハ鶴橋ノ歌換骨ナリ

我妹子ナリ

去来抄前を〜〜〜の〜〜〜と
作らて下もやと極めあふと
ナリ

穂屋六郎方郡信射山諏方
ノ神事ナリ

静の柳より〜〜〜教〜〜〜那

示輝

喉う〜〜〜鮎素尺〜〜〜の〜〜〜

凡地

〜〜〜其角

畫好

初雪平内〜〜〜人ハ誰

其角

初雪や〜〜〜歌〜〜〜

史和

葉やけの〜〜〜

雨紅

わきまら〜〜〜

採花

下京や〜〜〜

凡地

〜〜〜

同

信濃の〜〜〜

昔意

五元集ニ世焦空庵ヲ訪テ
杜屋花ニ今年就中老衰ト
歎キあり云
白氏文集香炉峯雪撥巖者

橘州豊嶋郡ヨリ此處ナリ

空也上人ハ延喜帝才二皇子ト云
元亨釈書ニ釈光勝不言姓氏
もノ字ニツラセテ瘦ノ字ヲ相兼
ト云

冬風の笛をきく

魂読ハ巻も下けを鹿の雪

雪の口ハ林の子をきく

後々も健々ハ雪の松

ひらけそゆるや雪のこころ

青臣追悼

氣香もよせき後ハ雪の松

から鱈も雪の松

海もよき情ハ雪の松

一月ハ我ヲ来ラセ給

任吾子純

其角

雨笠

卯七

吉来

尚白

芭蕉

乙卯

大草

五元集ニ息白キトナリ

元禄二年暮乙卯カ家ニ春ヲ
待玉フテ吟ナリ

弱法師ハ乞食ナリ

年ノ一夜ノ隔ヲ薄壁ニ比喩
セシナリ
貞享四年去来千子伊勢熊
野訪セシ事ナリ

芭蕉ニテナリ巻録又巻録ハ
非ナリ

秋沖亦や鼻息白一面の也

節重ハ又望ミハ雪の松

あゝやわらわらハ雪の松

乙卯ハ初室ナリ

人ノ心を切ミセキハ雪の松

弱法師 赤ハ雪の松

年の夜ハ雪の松

雪の松ハ雪の松

雪の松ハ雪の松

雪の松ハ雪の松

其角

唯歌

祐甫

芭蕉

其角

長和

吉来

同

卯七

其角

古文ノ遊子吟ニ慈母注ニ慈
仁愛也故謂慈母妙務尼
墓在于麻布二本榎工行寺

四月廿三日 慈母墓
かみまうらうーうらうらうらうら
茶わらぬあを牡丹のあうら

其角
干
金半

別僧

ちの町の心やまをこよ米藪を
智あるあうらうらうらうらうら

誠人
瑞成

見こりて

れ右ーまげーのーまげーはアのま
まらまらまらまらまらまらまら
井のまらまらまらまらまらまら

三人
社園
菟菜
半殘

古歌の如きもの……
心やまのまらまらまらまら
前書トス

題を来し頃味は海柳舎三句
豆梅の如も木部をまらまら
破柳やまらまらまらまら

仙化

南都名店

洗淨やまらまらまらまら
洗淨やまらまらまらまら

元兆
吾郎

豊園より

林のまらまらまらまらまら
林のまらまらまらまらまら
林のまらまらまらまらまら

元兆
左来

豊國社山城愛宕郡ニアリ
大山詩ニ零落東山古廟廓
ト作リ

中將実方長徳四年十一月
於任国卒

是時やうらまひ合は吟す

料足ハ錢の事ナリ

つらり綴の延語ナリ

剃刀 和名抄 鎌精

左傳葵猶能衛其足又聯珠
詩格唯有葵花向日傾

の塚にやまをたむけぬ道より

一里をゆく左の道はさかたに

思ひあふさうつらさうつら

とさうりぬくおとさるわ

是時やうらまひ五月のぬきり乃 芭蕉

大和紀伊の境をゆく一里を往

來の勝地をさうつらさうつら

料足つらり綴の延語ナリ

つらりもさうりぬく五月のぬきり乃 芭蕉

剃刀一和名抄 鎌精 五月のぬきり乃 芭蕉

日のたや葵 傾くさうつらさうつら 芭蕉

陸奥やまをたむけぬ五月のぬきり乃 芭蕉

七ヶ条の先鋒みまうりばさす

まをたさうりぬく五月のぬきり乃

瓜割のさうりぬく五月のぬきり乃

さうりぬく五月のぬきり乃

ひらさうりぬく五月のぬきり乃

してさうりぬく五月のぬきり乃

さうりぬく五月のぬきり乃

とるも力増さうりぬく五月のぬきり乃 其角

とるも力増さうりぬく五月のぬきり乃 其角

とるも力増さうりぬく五月のぬきり乃 其角

とるも力増さうりぬく五月のぬきり乃 其角

近江滋賀樂里ナリ

興丁

近江滋賀樂里ナリ

杜律註 凡流謂得前賢之流
凡遺俗
風流ノ始トハ陸奥ノ古風ノ遺
俗ヲ云リ
眉掃ハ化粧道具ナリ
法隆寺ハ大和南無仏ノ太子
ハ聖徳太子ノ御像也

つみかちふる世のふけや麦高 セ 游カ

縁を愛して

まき葉の草でやむる桂 智月

まき葉の草でやむる桂 エト 若紅

あまの川の新とて

凡流のそとをよみ交の田植 首彦

出羽のつねとて

眉掃を雨打りしてお粉の雪 同

法隆寺開帳南無佛の太子様

料の

法隆寺のそとをよみ交の田植 子形

鳴ノ海ノ潮ナリ

あらしをい賞東ナキリ

鬼屋谷ハ熊野山中ニテリ

田の圃を豆つるのり登り イカ 万平

碓氷曲水の橋より

嵐火や吹とてされて水の 玄来

惣田の雀見二句

雲のたや子竹泣はれ 九兆

嵐火や吹とてされて水の 首彦

之 熊野のつねとて

嵐火や吹とてされて水の 田上尼

あまの川の新とて 高ら

まき葉の草でやむる桂 半紙

病後

日の下に京ト大津ノ間一里塚ノ西シ

竹は五十年ニシテ花咲美ヲ結ヒ其竹則枯トシ自然枯ト云 篋又獲

千子ハ去来カ妹元録元年ノ没古九シ

原水朝ナリ一本浅ニ作ハ誤ナリ

日の下に京ト大津ノ間一里塚ノ西シ
 竹は五十年ニシテ花咲美ヲ結ヒ其竹則枯トシ自然枯ト云 篋又獲
 千子ハ去来カ妹元録元年ノ没古九シ
 原水朝ナリ一本浅ニ作ハ誤ナリ

日の下に京ト大津ノ間一里塚ノ西シ
 竹は五十年ニシテ花咲美ヲ結ヒ其竹則枯トシ自然枯ト云 篋又獲
 千子ハ去来カ妹元録元年ノ没古九シ
 原水朝ナリ一本浅ニ作ハ誤ナリ

六月十日祇園ノ鈴ナリ

...

...

唐より墨つく児りまゝをとりぬ
 月餅や火の氣の香 糖ハナヒ
 夕暮や帆ハナヒの音の響
 ちりちりて流よのそ
 雪の降たるの比叡の物
 猿蓑集巻之三
 秋
 秋風や葉をちりちり落しけり
 秋風や葉をちりちり落しけり
 秋風や葉をちりちり落しけり

子歌
 童歌
 高次
 北
 巴山
 羽衣
 水鏡
 正秀
 大サカ
 之通
 大サカ
 之通
 大サカ
 之通

全昌寺ハ大聖寺ノ城下ニ在リ

叡山ヲ大いえ少いえト和歌
多クヨメリ

芭蕉葉ハ何もなれど秋の夜
人よけを懐もを秋のりき

加賀の全昌寺より

秋夜秋夜きくや雲の山
芦花や浪うらぬ秋の夜
松竹や蒼蒼富のたきの風
初霜や枯の外はの秋のり
大比叡やととせ葉のたきの
之葉ちうと海松や桐の苗
文月やちるもたの秋のり
国歌の本の葉より

芭蕉
珠碩

菅原

山川

凡兆

去来

那志

凡兆

芭蕉

同

古今ニシテ一ノミナリトシテ
多クヨメリ

霏雨又微雨

去来
風麦
及肩
岩葉
杉竹
子那
史和
且葉
子尹
羽衣

去来

風麦

及肩

岩葉

杉竹

子那

史和

且葉

子尹

羽衣

字盛譜ニあるむきんやぬ富
為の當りてふひりるるや
甲ハ俗訓免罪ヲ傳ニ具
トイフ詞ヲナリ

去來伊勢記行ニ出ル
道中記ノ哥リありてふ木
のりく^トとてこもいそか
まされ洲田のさそり

和名抄ニ養魚 本州折頭
魚 養ハ借字ニテ字典ニ
所謂 不合ナリ

万葉ニ初月トアリ五日六日
ト云ハ非ナリ
伏見ノ城元祿ノ比又廢キ

むきんやぬ甲の下のきりり
菜畑や二葉の中のむのきり
様ありや蟹よきまて鳴板い月よ
むきん 尚白 風姿

葉月や花梅は流るんともん
この月又養魚のちきまをかりり
栗押とてとてとて初月夜
月見もん伏見の城の折頭
ふ子 之邊 半残 きた

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

山家集ニあるとあり
かこころのよきは涙のたふ
すく^トかとおもふふらふ
加賀未社 柳尾ノ社

醫者ナリ

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

おもしろくねとさるる月夜
蟹長き話 きてる涙のかる
イカ 土芳

氣比明神ハ越前一宮ニ仲哀天皇ヲ祀ル
本宮ニ世他阿土人古例ナリ細道純行ニ委シ

猶子カズ、甥カズナリ
カズ、斯有夜ナリ

大和物語花山僧正ノ古事ヲ云

向のよき前も月を新ナツくぬ

之福ニ年つるの湊は月を足

多比の明神も宿おの人の

古例成りて

自注一拾約のもてり所の上 芭蕉

仲秋の望程を秋送舞りて

かゝる花の月も足なり迎送う 去来

明月や変もさきの葉を承りて 昌府

月を承り人の魂をいかり 羽衣

宿正のいもよのやをのきめり 尚白

初瀬や鳴川の浪は鳥御子 凡兆

一戸陸奥南評領ナリ

雑又黄頰魚
和名抄ニ鱸知、加布里似鱸魚
而有黒點ニニヨリテ書ルカ

和名雅ニ鱸トス續虚栗ニ

王安石詩ニ茅檐相對坐終日
一鳥不鳴山更幽
むつり、云々冬ノ題誤リテ
爰ニ入カ

小ニ鱸ト云大ニ鱸ト云

一戸や在もやろく 弱むく 去来

稗の種もなつて 暮る 越人

濃糟やかくもなつて 荒 正秀

阿やなつてきりり 鱸 宗素

一鳥不鳴山更幽 凡兆

物のまひりり かく 凡兆

むつりも 括も 尺之内 千里

松枕庵のつき合 秋の下 珍碩

鳴るや濃糟 葉の葉 凡兆

上りて 阿や 秋の天 凡兆

鱸釣るは 鱸 凡兆

田舎開ト云ハ五尺八寸京間ハ六尺三寸ハ五元集ニ菜園ト題アリ

童子之又髪髪

掃去去来自賦ニイリ

敗足カ俳諧哥ヲ前書ニ用ヒ

田舎開の落し草一葉のふ
多きを切つてふもなうら
高生も小雛の鳴きや雪をこれ
このはのちももふれ福の秋
福うつく母は出逢ふらむる
九北
尚白
雲角
珠碩
土芳

自題後抄舎

村中や梅はちりきあふし山
志す浪やゆらつと梅の下紅葉
孤室一峰切山の落し草
九北
塵生
カ小松

村田系

されいしをばあとの梅のちなるは

大名衆ノノ敬言固ヲ云リ

風疹 和名抄ニ風癩疹トアリ

とてふはとてふとてふ

村田おの 靴うらむ 蚊足
拍子うらむらむらむらむ

そはた大名衆をうらむらむらむ
行秋の甲の弱るまらむらむ
立出る秋の夕や風をらむらむ
世の中ハ 鶯の尾の隙をらむらむ
塩魚の塩をうらむらむらむ
九北
同
若手

猿蓑集巻之四

春

梅の人の怒り梅もあつ
露沾

勸進帳 正月廿九日 月次興行
通題 梅トアリ

上鴨の菊亭及ちんりま
八具家三仕人

碧巖云隔編見用便其
牛意ナリ

家隆卿之歌ニ存するを
初めとす其辰も知るを
結とす草紙ニ就のちり

海一本古キ梅あり其外
ナリと云

上鴨の山莊より一く
候

梅の香や少路梅の犬子
梅の香や入里の牛の角

庭奥

梅の香や砂利を流す
初梅や骨をきき方ふも
梅の香や酒の角ひのた
く欠の梅やはしを蒸のた

活るゑの梅はしを蒸のた
梅の香

林和靖七言律詩三跡影横
斜水清淺唱香浮動月黃昏

元祿四年辛未

疲藪の梅の影の影の梅
仄控ても梅の影の影の梅
日影の梅の影の影の梅
暗香浮動月黃昏
入るの梅の影の影の梅

梅の影の影の影の梅
梅の影の影の影の梅
梅の影の影の影の梅
梅の影の影の影の梅
梅の影の影の影の梅

春田畑ヲ耕
おとす云

虚木立芽出シ又前云
莊子獨見二曰ノ野馬田間浮氣
名之為陽燄
柴胡曠野ニ生ス原本柴胡の葉
ニ作ル芽出シ細キ云カ梅ニ
原ノ書損ニテ亦亦相似タリ

元志
百葉
土芳
水固
元兆
芭蕉
配力
嵐雪
水通
水

今ヤ詞ニテ帰雅トナセリ

その門ハ雲ノ出ル云々云

田葉の島ハ掛川西生郡ナリ
今ハ北濱ト云

畦ノ抄ニ見エタリ
畦ハ區ナリ菜茹百畦

元兆
水通
配力
嵐雪
水
芭蕉
史邦
史邦
昌房
玄来

元祿以雜の使ト云事アハ
姿カ

田螺ヲ臍ト見立シ

魁実葱ノ花ナリ

加賀ノ白山ナリ

源文選注兩水流於地者

こもくハ芥ナリ

衡の葉、諸説アトコニ出テ
以テ春ト定ムヘキリ

春風よこしき風雜の女、のふ川
 桃柳破り阿くや女の子
 桃のむ境きまふの地根、の
 里人の離るる田螺うな
 蝶のすめく一花床より葱のき原
 分香切きてら松う枝をり(哉)
 いらのゆり愛ももまもや 漆
 日のかけやこもくのこの祝まら
 荷鞍ふむまの春や標の文
 雲のねや筆をよこつてる樹
 越より花弾一はをいしの海りの

萩子
 阿子
 鳥巢
 窟推
 半残
 梳妖
 園風
 珉石
 土芥
 芭蕉

十秋主の東遊ナリ

嵯峨日記ニハむく

誰小綱
後ハ一重草トナリ一重

白玉科ト云非ハ重ナリ

外ちやうきふくももまよふ
 小計はまふら
 驚の葉の標の枝まらひのぬ
 雲よりアスアスあふまうか
 子やゆんちやうきまの言
 白より水の中へ流るや箱
 萱草の編法ゆり阿くや
 木山筋松
 山吹や宇治の焙
 芭蕉

九兆
 石口
 杉皮
 芭蕉
 曲水
 山店
 芭蕉

白玉椿ヨ云花ハ八重ナリ
キハハハ際立ヲ云リ

髪梳カミコ

梅のふとふと

十坊主の鬼遊トノノ戯カ

白玉の露しらたまのつゆつく桂かきの形 車来

あふかきとく病うちぢり真髪

けつらんも抱むうとばあきまを

らて

算も様もむうーやうり桂 羽仁

蝸牛かきおかきさるるつむぎさうれ 坂上氏

さうのさうさうさう桂かきの形 芭蕉

初はつたくらつらとくとく遊あそぶぶはは候まいいりり 利吉

東あづま嶽たけ山やまはは持もつつ 其角

小こ柄がらももやや松まつももかかつつねね山やまささくらら 尚白

一ひと枝えだいいままららぬぬももささららししふふままくくふふ 尚白

船ふねののああららままききととゆゆるる 山やまささくららり 九兆

山やまささくららりり 持もつつふふららちちらら様 大子

ららののああららままききととゆゆるる 史し非ひ

ああららままききととゆゆるる 子こ那な

葛くわ城じやうののゆゆもも成なるる 芭蕉

ねねををくくーーかかよよりり 神かみのの鳥とり 芭蕉

何なにれれのの國くにをを持もつつ庄しやうららままののゆゆ 芭蕉

ああららままききととゆゆるる 神かみのの鳥とり 芭蕉

ららののああららままききととゆゆるる 芭蕉

一ひと里りいいははるるををささのの子こ孫そんららキキ 回

ここののああららままききととゆゆるる 回

谷中やちゆう東あづま嶽たけ山やまのの乾かみニニリリ

小端こはたナリナリ 笠かさヲヲ云イハハハ非ヒナリナリ
非ヒハハ午ご時じノノ食け也也 僧そう徒と律りつ言ごん
午ご時じノノ日にち影かげ過かシシ 髪かみ瞬しゆん即すなは是し
非ヒ時じナリナリ
一言ひとこと主しゆ神かみノノカカタタ子こ見ミニニクク事こと
清きよ輔すけカカ奥おく儀ぎ抄しやうニニモモ見ミエエガガ
上かみ東あづま門かど院いんノノ時とき余あま野のノノ庄しやうヲヲ
分わ千せん花はな垣かきノノ庄しやうトト名な付つテテ八はち重じゆう
柄がらノノ料りやうニニ附つセセシシトトカカヤヤ

鑄物
鑄物ノ火中ニ置ル者
師ニ執作リ職人ノ格モ有ヘ

鰻
鰻一種多ク乾魚トス

ぬのこぎろおふねのうたれ
押合ておぼろふ又立飯やうら
ふりりのやまのちりあきを
一搦シつるるやまのうら
枇杷の古葉よ木の芽もえ
去来九芭蕉九凡兆九史部

布巾のうらやまのうら
あつしりくを門くうら
二番のうらも果ては種はせ
灰くちもくくうら
凡兆
芭蕉
去来
兆

東鑑ニ調柏子トナリ

聖藤左衛門繁氏法然上人ノ
才子リ法名等阿世三川萱
道下云其氏ニ山々トナリ
系もちぬるよくらあのみ
よきくあしし
七尾撰集抄ニ見仏上人ノ事
志りやういふ名ふるニテ
小出つは未摘花の巻ニつたの
系もちやういふ名ふるニテ

はるのうらも尺やんふりやま
ふりやまのうらも尺やんふりやま
落の芽よりうらやまのうら
道下のおらういふのうら
結糸の七尾のそいほり
魚の骨よりうらやまのうら
ゆらんふりやまのうら
立かたり屏風を飾す女子
湯屋の外の葉のうら
苗葉のうらも尺やんふりやま

芭蕉 凡兆 芭蕉 凡兆 芭蕉 凡兆 芭蕉 凡兆 芭蕉 凡兆

赤草紙に僧孫夏、句三人のちん
を一かど、世のちん板と附
對附す
地子に年貢

思ほふに黒土

丁稚向附す此く、俗
なり、不意、詞力

天上守に唐辛子

又句附す赤草紙に委

傳や、定く、幸ふ、さうり
 猿川の、猿、世を、終る、秋の、月
 年よ、一斗の、地を、と、か、く、
 五、ち、本、生、生、木、つ、け、た、る、
 思、感、端、う、い、は、思、ほ、ふ、の、乃
 追、も、く、早、き、さ、あ、る、の、口、指
 て、つ、ち、の、さ、あ、あ、あ、あ、あ、
 戸、障、り、も、お、ち、あ、あ、あ、あ、あ、
 こ、ん、ち、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 こ、ん、ち、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 だ、を、さ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

去来抄三前日草庵、句、西行
能因七上の、境、末、と、あ、あ、
り、又、面、景、と、付、あ、あ、
未、文、も、同、趣、す、

浮世の果、句、雜談集、委

一本何れ、う、す、平、二、誤、ル

掌、20、
了、克、
寛、者、思、ふ、シ

その、傳、ま、あ、あ、あ、あ、あ、
 け、い、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 さ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 浮、世、の、果、と、付、あ、あ、
 け、い、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

凡兆士芭蕉十二去来士

有り明の灯

冷
夏の一の夜を
お三龍暗を思草
秋李の扱心ス
何のま六赤流ナリ

死生事大無常迅速

旅の馳そまらぬ
き女の智あるを
やあまの子 糧の
夕月秋の 燈の
人もこころ
くもつるよ 自慢
みもたすの 能
地うり 田の喜
か茂の社
物まの尻
るの居

水 来 燕 兆 来 水 兆 燕 水 来 燕

西念諸説終く只面影ト
山家集ニ吹せの
酔並ハ下字集ニ
聖漬一種

の
金
町内
何
本
の
葉
と

水 来 燕 兆 来 水 兆 燕 水 来 燕

有り明灯
冷

及のををうむのちい
々更何のわと思ふ人
お龍膽を思草ト
秋季、扱ハス
何のさ赤流ナリ

死生事大無常迅速

旅の馳そよはる
き女の智恵も
やおもひの子 狼のし
夕月秋風の 燈 福の
くもくもく ちる
くもくもく 自慢の
みもちるの 飯を
けうの 田の喜や
か茂の 社らよき
物雲の 尻餅 高く
るの 居るの 世は

蕉 水 兆 水 兆 水 兆 水 蕉

梅ヲ正花ニ用ヒシハ祖
カ芭蕉談ニ委シ初
作ルヘカラス

銭ノ吟長途ノ景物ヲ想像
玉ヘリ

和名抄葉之度岐三才
糯糍今ハ生米ヲ以テ餅ノ形

梅の菜すうこの
銭乙品東武行
九兆九芭蕉九野水九去来九
水 来 兆 水 兆 水 兆 水 蕉

蕉 水 兆 水 兆 水 兆 水 蕉

二作止物ニシテ只祝ト見ルニ
カ
病休ナレト尤モ輕ニ

山家集ニテ山浮世を
より成るべくしるす
あやふらふらし。去来文ニ
の西のふむのふむのふむ
ハトアリ
箕手甲陽軍鑑ニアリ小西
行長ノ臣ト堀内藏頭ノ

秋の礼云云。去来文ニ撰集
抄の故事を取リハ薄刈
萱女郎花をとりて
と改メて礼を付しるす
〜

外海

懐の鏡の極は去来の日。母女
字並ヒテ今ハ嫌ハケト古
人ハカク瓊ノタリトハ論セザレバ

職人歌合ニツクテ
くまなるや方のあつを
るみおひは

片隅の虫歯かきえて誓の月	二階のまはるくねるあま	殺ゆるくつみの睡入えもきん	縮の紫地のちりあまを	菟の初よこゆる終唐の	内箱のかきあはるこれ	卯の刻の澄よまきよあま	まきまきねのまらるる	秋の礼云云のねよみなり	春かきくゆる百活るの一	懐の心をあつむる秋の月
忍	蕉	男	破	蕉	忍	破	男	忍	智	元

汐まきくぬおの海つら	鏡の極は去来かりくちの暮	灰箭をくちかじ葉のた	まのやまは舞るる狂机	所居屋のらあけののかり	汗ぬら山燈のまきあおの糸	あれまきくちき新の下	大膽におひくちねあま	あやぬれ秋の取あまき	小刀の陰あまき	桐またるもま大なるの根
弱	去来	北	西秀	東	半	土	残	芳	破	園

思ふ後らふらふすふらふらふ
むら打合せの袖の色はあま
つら

咳声

小正面ハ才覚ノ事ニクハ正
直ノ事ナリトイフ元同語ニテ
音便ノ遠シキカ
會津ハ奥州

句引十六人ノ俳名畧ノ

爰ナクハおらふ便もは磨の浦 猿頼

むら打合せの袖の色はあま 残

は反もかぬをさるる 破扇 風

猪油の油をせりきり月見の 難

咳声の隣にちつき根つきの 芳

添いそふおとあくあんなを 風

形すき陰を思ひくさる急津を 嵐集

是の雪うらむ味の割下結 史和

ちよやうこころのつらも定ふ 氷

鈴の袂を染るまのせ 物

猿頼集卷之六

幻住庵記

芭蕉抄

石山の奥岩間のくくありま山あり
國か山とつふそのか國分寺の石
を傳ふ所なり林麓は細き流を汲つて
翠洲を流るるなり三曲二百ありてハ幡
堂もあつたなり神作は神像のそ像
とらや傳一のあまハ葛息なる事を
部光をわけ利権の事を因り
去るまも又あつたなり人の語まり
りたつて神作の志ありなる傳ふ

幻金剛經如夢幻泡影
住也居也庵公舎也草姑
菴間此草老叟可蓋覆菴
園故名記也今別記之
也
岩間山正法寺後山國分寺
聖武天皇天千九年詔天下每
州建國分寺
杜律注山未及上界微ト云半腹
一歩ハ六尺云
國分村鎮守近津屋ハ幡堂ナリ
東見記日本神道有三種一曰唯
正宗源二曰西部習合三曰本迹
縁起
諸神鎮座記ハ幡大菩薩本
地阿彌陀如來也
老子曰和其光同其塵云云
上及年久シキヲ云

睡癖、宋書陳搏癖史季
 巖老睡好、其五雜
 組等、癖人多、
 屏願東坡詩唯要兩脚飛
 屏願王子端詩、篋外、屏願
 皆好山云云
 石林詩話、青山捫虱坐黃
 鳥、林書眠
 一、
 僧正筑後御井郡高良山不
 濡山蓮、蓮院主一如僧正
 加茂、祠官藤本甲斐守、
 實永、此能書三、
 師流、
 津、
 記念遊仙窟
 贈之
 々々、
 々々、

人の跡、
 み、
 を、
 の、
 教、
 かり、
 言、
 ち、
 る、

古文前集朱晦菴、
 野人載酒來、
 張謂詩、
 又白氏文集、
 影伴身、
 莊子問、
 今子止、
 周、
 漸、

坐越の、
 夜、
 る、
 う、
 の、
 新、
 ら、
 好、
 病、
 信、

任官懸命君又仕へて俸祿
領知ヲ列ウラヤムリ
惠能禪師吾三十而六規佛
籬祖室
多シク其ハ原本又翁自書
卷物ニテ斯アリ風俗文選ニハ
多ク其ハ意カ因云云アリタト
ル方トキ意カ因云云アリタト
自書卷、假名ヲ寫
生涯壯子ニ吾生也亦涯

白氏文集佚詩役五職神
酒河三丹田元積詩ヲ引非
ナリ
李太白寄杜甫詩飯顆山頭
逢杜甫頭戴笠子日卓午
為問綠何大瘦生只為從
前作詩苦
白氏文集佚賢愚共垂落
論語注尚質周尚文
山家集なほひあふなるそな

おりのりる何仕官懸命の地を
そくしるのハ佛籬祖室の籬
かんとせしもろくそなよ風を
まをききえちる不性を
智く生涯のまろくそなよ
終るや結多すそくしる
樂天も彼の神をぞり老杜に
たり賢愚文傳のいかに
いふく幻の極をぞり
ふぬ
先ものむ極のまありなるま

わぬ仕のねくそくむ極の
下枝

万葉集片岡のいむそくむ極
すのそく年の夏のむ極
源氏推本の巻のいむそくむ極
いむそくむ極のむ極
中して云云

足後為政故書文字後曰政

芭湖琵琶湖
鬱茂盛貞

題芭蕉翁國分山幻住庵

記之後

何世無隱士以心隱為賢也何
處無山川風景因人美也間讀
芭蕉翁幻住庵記乃識其賢且
知山川得其人而益美矣可謂
人與山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

芭湖南兮國分嶺
古松鬱兮綠陰清

佳人有佳美之徳ナリ翁ヨサマ
 満口錦繡ハ約住庵記ヨサス
 依稀ハ髣髴ナリ
 勝覽ハ名所ニ同シ

震軒向井元端字履信号仁馬
 子又向震軒ト云去来ノ見ナリ
 具供具也草ハ草稿也
 伊勢ノ震風又丈草ナト云々
 ハ推量違ヒナリ

茅屋竹椽繞數間
 内有佳人獨養生
 満口錦繡輝山川
 風景依稀入誹城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日

震軒具草

約住庵抄老日記ノ向ハ庵ノ別館
 ト勝地ノ眺望上翁ノ幽操トヲ
 賞ミルナリ

とつさめハ翁ノ嘆ニ云リ
 とき時ハ鶏ノ乱レ鳴時ヨイフ
 海深ナリ

岩梨ハ常ノ梨ヨリ花遅キ一種
 ナリ 和名松稿 夜未奈之山梨也
 細腰ハ俗ニ云ヤセナレナリコレモ
 ナリ云

盛ナリ 神佛 餉 細
 ソノ結ヒナリ

凡右日記

耐を嗜中ニ及々やる林麓ノ那
 とつさめノ何と云ふ友ノ山
 雲ももろり〜町ノみぢぢぢ
 海向よ五月るぢぢやと〜ノ之
 新しきを山梨新け新けのあ
 細腰の体ハ 雲や友ノ山
 贈紙帳
 おり〜ノ紙帳をけ〜後
 山梨新け〜のあ〜も
 新しきを〜のあ〜も

曲水 那水 去来 凡兆 子那 珍碩 我經 里东 乙卯

扇女

羽衣九兆ノ書

寵馬又寵雞酉陽俎狀如從
織稍大脚長好窓電旁

明年弥生八元祿四年ナリ

木履ぬく傍よ生るり葵の花

色紙ノ書

踏ふと花菱袋や秋の霞

裾の委らぬを佛の土産

石山やゆゑをこゝろ秋の風

桶の端やまはてゆやむきり

墨ハタタ飯時のちろろを

吹やゆゑ塩をゆゑのまよふ迄

越人同く訪きて

蓮の葉のせまふ入庵うぬ

明年弥生辰巳年

木履

扇

智月

おお

昌彦

何如

越人

等々

たまやありしも果て戸のしつこ 花菱

同夏

涼きやゆゑをこゝろ秋の風

Vertical text in the top-left section, mostly illegible due to fading.

Vertical text in the bottom-left section, mostly illegible due to fading.

又記滑稽猶俳諧
一本諫之韻誤靜響音同

清正記云唐大中年終南山僧
其加黎衣被于安坐之群
猿有于隨皆定坐于習之史記
項羽記人言楚人木猴而冠
果然逸人送也
定坐之習此事林間錄也
云非其錄中此事十餘尋
孔學記之不識守曰不凌節
而施
孤曉自來孟嘗君故事上王
哀講德論千金之裘悲孤之
腋也
易曰憧憧往來憧憧徐只
詩大雅編隆蟲編聚也隆
盛也
昆兄也仲次也
駭志說文今謂文人為駭人也

禮記檀弓吾離君索居索散
也 竄隱也蔽也 極上り
旌倪孟子見之り 旌与老同倪
弱小之称り
東坡全集龍尾硯歌言
細語部不擇
域界也 四序四時云
恥古之時字之日 檢年也
穀一熟為一年
叔氏安管安 僧為掛錫
浴書同 卒ニカナリ
揣度量り 廢樂希望也
詞海漁人ニ 俳諧詞宗ヲ撰
風狂風騷司野 鄙ナリ
僧衣謂衲
丈野尾大山世臣二十五歲ニテ
辯武王堂和尚參彈出家以
前芭蕉門人懶窩又佛約庵ト
号元禄十七年二月廿四寂年
四十四
漢輟耕錄謂賤丈夫為漢子

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首辭也非
比彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任
心感物寫興而已矣洛下逸人凡
兆去來隨翁遊學棋館竹窓躡等
凌節斯有歲屬撰此集玩弄無已
自謂絕超孤腋白裘者也於是四
方嗟友懂々往來或千里寄書書
中皆有佳句曰瀛月隆各程文章
然有昆仲騷士不集錄者索居竊
栖為難通信且有旌倪婦人不琢

磨者虛言細語為喜同志雖無至
其域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也維
昨元祿四稔辛未仲夏余掛錫於
洛陽旅亭偶會兆來吟席見需記
此更題各尾卒援毫不揣拙庶幾
一蓑高張有補于詞海漁人云

風狂野衲

丈草漢書
正竹書之

文章漢カ漢書ニアラシ
正竹ハ雲竹門人

漢相如ノ文ニ朝開元窓夕汲
心泉

莊子逍遙篇亦人有善為不
過手之樂者或曰樂地封之
能不過手一也。朗詠。座炉
辺手不重管公
小文庫續五論真蹟集金
屏の松の古さより作ル笈日記
赤神庵金屏よ吉のや三作ル
句選泊船集金屏の古さ

上人長

炭俵序

此集を撰むる孤屋野坡利牛翁ハ常一
首を造り新しかりかゝの瓦の曲を以て
心の空をくゞとて十何年もの
の野火をくゞとて十何年もの
阿彌陀をくゞとて十何年もの
まゝ一炭をくゞとて十何年もの
宋人の子カキ宛らまゝとて十何年もの
古のオキお茶をくゞとて十何年もの
様よまゝとて十何年もの
善く古よりまゝとて十何年もの

三作ル
柄の目鷹の目ハトキニヤト
テユリ

王譜詩有聲画無聲詩

蓋斯
毛詩正義曰名篇之例義無定
準名不過五
源氏学花の巻の巻の巻の巻
はにやん

耳ふのけくもくろく 柄の目鷹の目
とののそよ魂のまらりくろくや
を思のを喜のけのつぎくろく秋
の目よかしくかむけつや
着ちうく後よけはけちの二
わくろくまんそよをふくそよ有る
の画をのやうくそよむれくろく
めめんそよくろくくろくくろく
けくろくハ詩の正義まくろく
あるハやんそよの巻の巻の巻の巻
柄の例の目よけくろくくろく

文選首途

酔醒集ちきりちきり
酒のつりとのぬきまらり
ねやのつりとのぬきまらり
くろく

考

誼ハ閉

より所りつて事形しはる。芭蕉拾り
の首途まつるくろくを撰つて再考の
契りつはるの集のつて及てかの巻の
扱相々柄のめくろくくろくを巻の巻の巻
をくろくくろくくろくくろくくろく
ハ誼をけりて指をくろくをわくろく
くろく思のくろくくろくは集をくろく
成るくろくくろくくろくくろくくろく
云控くろくくろく今ほくろくくろく
おのくろくくろくくろくくろくくろく
并をくろくくろくくろくくろくくろく

元禄七年夏閏五月朔三日志就書

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

炭俵集上卷

梅うらまのつきの山影の如
 変くく小雛子の啼くつ
 お夢話を去のそ遠まとうけ
 上の事より又あつる米の由
 宵の月をとりとせし内の中
 薪部しをそ秋のきりしき
 清江一筆もふつと知ひさくさ
 娘を望み人よ阿いせぬ
 安良通の因つとる細基子

芭蕉
 野坡
 蕉
 坡
 蕉
 坡

奉白集おろりしやまどひて
 ありうけ負ひしはまのり
 ちん

班イライ

沖頭

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

津家 津、宇四句去
祖翁見落シテ許シ玉介

終宵

蒟蒻

意掛一本舞掛ニ誤ル

居合、劍術、林崎、重信、カ、未、澄

京師生寺自三月十四日至廿日
有念佛其間夫作俳優
东風凡ハ時雨の雨風の冬
ナトイフ和歌ノ例カ

夕暮の霞のふらふら白
新けたる味増ふまじく白の雲
はくはくふかふか木立のりる
路首尾の影を押しけり
えんえんくまのり跡る 名月
初原ふふ知下地おてん
お路をおくふ居合比しぬ
町尻の影をまじと碇てむの影
門に押しくまの生の高伸
東風くまふ雲ののきねを押し
まじ居るまじく臆るつら

坡、蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡

會林説話閉門可愛庭前月

親子ハ親属くまのりてあふ
親ト子トいふまじハラス
元禄ノハ浪人ヲ穿人ト書ク
白氏文集ニ穿落
ナトイフ

江戸の夜を白く白く
こころも白く白く
あつた白木の木の影の
桐の影をまじく月
門をまじくまのりて碇てむの影
はくはくまのりて碇てむの影
初年よ女房のおまじく
又まじくまのりて碇てむの影
法印の海法をまじく碇てむの影
碇てむの影をまじく碇てむの影
まのりて碇てむの影をまじく碇てむの影

坡、蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡蕙坡

未進年貢ノ納ノ跡ヲ云

兼好ノ事

双岡ト云る書より一
孫は天王寺ノ思安坊地ニ
シテヤウニ住ルベク任テ分
寂閑クシテ命ね九とせよ
遠望ノの地をこしらへて至
候。よ高れ候と云云
持は福多ノ小館ニテ作ル
雀館ト名ク

魚ノ喰あしく深の難炊
子多鳴一換くよささる
未進のふのそとぬ兼用
隣ト云くも人候をつれて
屏札のかけは尺の兼用

魚 坡 兼 坡 兼

三吟

兼好も遠蹤りしむきり
あきみや首ノ雀館も
序をさるるの少飯の
おをぞとくく園ふを撰情

嵐雪
利牛
那坡
智

雑話集ニ朝日頃の夕月秋ハ
七日以前の月をいふなり
又源氏物語にもあり

泥濘六田野赤波水ニテ濘ル云

蝶ノナリ寵ニ非ス

豆ノモヤシヲ料理家ニテ貝割ト
云リ

黒谷岡崎聖護トモニ洛東ナリ

綱貫八草ニテ作ル雪水ナリ

雑役ハ馬ナリ

おくと新のころの音の自
可箱も晩箱もま生み
泥濘をまよふ流れよ
おととらま経ハ昼の鐘
隣りも音も候も
さくくくも音も
黒谷の口も音も
石のかけも二
縁の音も
人の音も
新役の音も

牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡

名々々
瓜隨こゝ庭訓鍋トアリ

聾ハ俗字ナリ

野准ナリ

飯の中ぬる芋を揚る月
漸と白浮をそよ風の風
鶴のくそにまゝ斬かく
まゝのうらまゝのうらまゝ
控ふる子のぬれをまゝ
くまゝと河ぬる物医らけ
心んかゝる葉のせんく
罅々身て娘のせゝく
たの年の暮いけも
空佛の細きゆきをまゝ
はかすゝのふる時よふ

雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡

三三
片ナリ

受

新編御成敗式目

葉の種、踏らぬ風よひ
馬場の屋敷の海よむ月
あはれもりく江戸て人
なまなな屋の口いお
まゝのうらまゝのうらまゝ
ひらぬくまゝのうらまゝ
福倉のたまりぬれを
まゝのうらまゝのうらまゝ
獨りぬれをまゝのうらまゝ
まゝのうらまゝのうらまゝ

雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡

深川芭蕉庵三行テナルシ

いよの川はあつて

空豆のちほくちほく麦の穂

孤屋

登の水鶏のちほくちほく深川

芭蕉

と張をちほくちほくちほくちほく

水

ちほくちほくちほくちほくちほく

新牛

ちほくちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほくちほく

水

ちほくちほくちほくちほくちほく

牛

ちほくちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほくちほく

水

僧都職原抄三准四位殿大権
大少正権四分

僧都のちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほく

風柳のちほくちほくちほくちほく

水

ちほくちほくちほくちほくちほく

牛

ちほくちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほくちほく

水

ちほくちほくちほくちほくちほく

牛

ちほくちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほくちほく

水

ちほくちほくちほくちほくちほく

牛

ちほくちほくちほくちほくちほく

蕉

ちほくちほくちほくちほくちほく

水

鉢坊主ナリ

七クニ名月附たきの詞ニテ
考セタリ

置るるをねくくかき成るる
名の傍よまをくくをたす河を
あををさして 挿る 楊玉
夕のつらみをの屋を成 挿るる
年 黄流をををえしれふり
息 漢よ祖父の白髪をさすまよ
垢 忍をくくぬ 古く月の思
名月のるまをせきき 芋 畑
さくくくくくくくくくくく
らよのれをを箱の通るもを
山の松陰のくくくくくくく

襦ハ禪同シ貫両脚上繫腰
申也
鳩ノ名目ユエ珠數云モ表ニ不
嫌

様きよをりく風の吹出
晒のつよはくくくく 晴 子
花足よと女子斗くつれきて
余のまがくくくくくくく
各九句
而 歎
子ハ裸父ハくくくくくく
岸のくくくくくくくく 呼
るはくくく珠ををくくくく
よ力所よりくくくくくく 風
竿竹よ茶危の袖もくくくく
利半
水 牛 危 蕪 牛 水 蕪 水 牛 危

弦打六讚州綱ノ浦山ナリ
水蘊和爾雅水雲和名又海
雲上云
蚕四度ノ休三アリ終ヲ庭休去
小登ハ巴列過ヲ云

枝王寺ハ嵯峨ニアリ小倉山ノ麓
ニ尊ハ釈迦弥陀ヲ本尊トス
信心銘 臺盤有差
天地懸隔

弦打風 海を とる 梅
梅 婦 結 かひこい 庭 子 記 かり
小屋の ところの 空 志 つ こと
椽 埒 下 程 々 々 足 程 程 程
編 の 濤 かけ を 意 入 入 入 入
表 如 の 踏 地 踏 踏 踏 踏 踏
賣 子 子 子 子 子 子 子 子 子
物 毎 子 子 子 子 子 子 子 子
又 古 局 の 古 志 々 々 々 々
枝 王 寺 の 々 々 々 々 々 々 々 々
り 子 子 子 子 子 子 子 子

屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡

ヒトツクリ
一續生

ナンスキ
滑 麓 ハ 頓 背 ナリ

新田川 添 模 様 ナリ

爆竹ナリ

為 雪 の 々 々 々 初 冬 を 降 出
比 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
鉄 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
ち 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
同 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
又 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
か 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
入 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
海 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
出 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
水 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡 屋 半 坡

榎原ノ京々条通丹波口

時薄暮ナリ

何年菩提トハ久シキヲ云々
提達磨ノ九年面壁ヨリ起ル

濕氣ヨリ受シ病ヲ云

水菓之類ナリ物汁
谷の内引越て居る榎原
尾難多き返り少く
落かろく時雨好
ハ丹つく月ノ六月
拭立て居上ノ木
高まつつる洞か
大水ノ阿波ノ烟のけ
何年菩提志取ノ木
虫屋よ弓月ノ夜を
丸中ノ日濕を

半坡 谷 半坡 谷 半坡 谷 半坡 谷 半坡

一本つづつてつづつて誤ル

土のハ朝日初カヲ云

愠ウト心徳果トセ

茶花ニよつらんもてさせ

丁寧俗ニ口篇ニ作ル非カ

定免ノ年貢ノ定リナリ

投打も後立ナリ多ク
是ナリ其名盤ナリ借
里籠れ昨世引のゆつ
和らぐ身のを娘の襟
象示かたる新の馬車
うんり果ナリハモ
丁寧ミ仙臺縁の口
訴治ク漏て土も
夕月ハ醫者ノ名
色了成る鯉のや
定免ノ年貢ノ定リ

半坡 谷 半坡 谷 半坡 谷 半坡 谷 半坡

加茂法示百首夏十五首中
此のいハ伊勢のまろ人言て
伊りられきまかろ
猶去来抄ニ委ニ
慈鎮

りまを はさくもねぬおとろ一
隈の結ふ玉困さくるさかり
紫月 かりて越るを色 坂
蔵もをぬ綴治屋の石壁の石遠
門建たれ町のあ 碓
彼岸色一重の玉の咲きて
之人あういおひらきま
喜の部 散向
立者
芭蕉
牛 坡 屋 坡 碓 草

拾遺三傳あふいさくを二言
をんりらる川のまいこえぬ
平家物語ニ暖まらりけいそ
伊りられ人として播磨の原
丹波ニ城下り

柿小袴雀ハ奴隷ノ比喩カ

懼
ナリ

その世のくまをさるとをさふか
まはらふふあめまのまれもや
せん

あまやまろ石もらんかきう松
みちのくのりふ算越ん管の海老
まや様ふ丹波の鹿も踊ると
刀まはれもつれ〜とねのま
いそかりきまをさすのかよ袴
喰つるや本名の白ひの櫓りの
けいまおのつ徒坊まの水程の
目下も中の中や年の町
初日新衣草ま〜とすれま
まねう歌のりま〜はまら
梅

溜子 杉風 去来 正秀 酒壺 谷水 沽園 孤舟 利半 聖波

徒然草三京極入道ハ一重の梅
を評ふ極く極く好むなり
又梅 諸木又よきものて屋曲あり

住瓦ナリ

飛鳥リナリ木枯白ノ腸ノ詞同シ

梅一本不れくそりの海うりぬ
 くらん後や白の秋本秋よき申う
 梅うぬの所えまきう 初口うぬ
 梅のうらちをらんあそし
 梅ちりや木のきの口能白い
 梅咲て湯辰の浦をうらり
 未味崎の口を白り梅のを
 みあへくは後をらん梅のを
 梅ハ娘をうらり書きた外
 としうらりも新し 白く書きた外
 壬午

土芳
 利牛
 泚刀
 聖坡
 杉風

老や梅の上かけし切刻く
 くらむれも多葉梅の腫うぬし
 梅月一思つてもわらわうぬ
 大原やうふの生を梅 梅月
 梅月やうもををぬぬ中ぬ
 梅川の家
 老をやうの梅も三ヶ一
 十女をうや睦月の古も美
 梅の恵初もぬをぬぬ表之
 梅の多ぬらんつをぬぬ小梅外
 壬午

聖坡
 仙秋
 大原
 大原
 梅月
 梅月
 梅川
 利牛
 之乃
 聖坡
 壬午

るはらふふふふふふふふふふ
まきまきまきまきまきまき
かきまきまきまきまきまき

利半
即坡

夏之部發句

首夏

塩魚の煮干しはくしをこ
まお十口をやくしをけりり
雛をぬく雛をぬく雛をぬく
花よりやまきまきまきまき
足の下とくぬくまきまきまき

岩寺
即坡
丸籠
雪芝
子珊

碧嫩集 柳暗花明十万户

馬青白色也去來抄三月毛
トアリ公翁ノ一直ニヤ

おろかけ桶ノ籠掛り

棹ノ歌ハ船唄ナリ

宗徳の蘇世三名高
万葉十六又袋草紙ニ新田部親
玉ノ婦人猪石田の池ハ赤
草ニオハシラシクハ整ナキヤ

庭の暖簾はくしをこ

利半

卵を

おのちやくしを木の及枝
くりむの陰もあかん雲のい

芭蕉
五来

旅の

卵のむよ芦毛のその木の枝
くのそよおろかけ桶ノ籠掛り

許六
支考

歌

棹のうらやうな舟のちり船
整の中祇池よまきまきまき

湖春
素堂

草や木のまきまきまきまき

芭蕉

けしきハ氣疎ナリ又物悲キ

ハケナシ
無人望

源氏横笛ノ奏ノ伊カ

阿刺夷泡盛ノ上品ナリ

餐膳

別墅別荘ナリ

けしきハ然ガハ梅ヤヤウノ事

一枝ハまけぬ外ノ事ヤ

外ノ事ヤ見ノ遠ク事ノ事ナキ

さう人僕ノ心をたむかす

戒めぬて海ナリ

よと知て何と云泡盛ナリ

あまて何と云れ終ハ海ナリ

改テ酒ノ名ノつく事ナリ

何人ノ別墅ナリ

物ナリ

何と云

福甫

仙花

岩重

利牛

中波

炭俵集下巻

秋

秋の雨れつれつの中
月を照して時侯の序を
えとす

名月

名月や又つれつれつの中

名月や又つれつれつの中

名月や又つれつれつの中

名月や又つれつれつの中

名月や又つれつれつの中

名月や又つれつれつの中

岩重

岩重

岩重

岩重

岩重

岩重

望シテ大サナリ

吹起テ手ヲ合テ鳩ノ真似ヲ云フ

望峯不下筑波相望ヲナリ

おろおつたまきもなごの月 其角

むきりの竹秋の月初とらん侍そ

望峰ノ不盡筑波を

あ月やふと一尺ゆかき路河可 嘉新

セウ

葉の葉ふ枝けりゆきむら 其角

星古ふもえさつおや枝をの結 孤舟

ふとふもえさつおや枝をの結 花雪

玉葉集

たうきげよかけらふ新や玉を 海堂

福とまきねふの結と冬月 李由

江州

李由

冬月 麻々かきりきりきり 理坡

鳥鳥

閑閑

お鳥やまは鏡あうまの結 芭蕉

おのや日痛生るり結の結 利合

てーおと鳥鳥を守り結り結 湖香

秋虫

年よれおろかろくまきり 智月

悔い少人のとまきりやまきり 犬子

懐懐よんそまきりぬとみ 為吾

あろろまきりまきりまきり 孤危

閑閑ノ誤風俗文選ニナリ
説言葉明ニシテ人ヲ教諭ニ
ナリ

古歌 柳うま枝揺のむもも
せは、柳の枝うまをうま

きくやうな物なれまのくやうこ
まをたうひおまのまをくらまを
まをまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ

イナク
黄草

石見の地は松の如く産する子
お撲んをふぬや秋のかしよき
居風台のやおまのまのくやうこ
碓のまのまをくらまのくやうこ
秋のまのまをくらまのくやうこ
草のまのまをくらまのくやうこ
夕霧のまのまをくらまのくやうこ
まをくらまのまをくらまのくやうこ
秋風まのまをくらまのくやうこ

お波
お雪
お花
お草
お枝
お信

唐ノのら袖くし月ノ光 其角

冬ノ部

初冬

風や沖より雪ふしのまきね
 市中や木の葉もむらなく三冬
 冬木の隙くまぬるまきね
 松の葉のまきねむらなく
 刈草の葉の隙くまぬるまきね
 風の葉のまきねむらなく

冬角
 松端
 冬角
 支梁
 斜農
 相笑
 残雪

和名抄ニ雞冠菜度利佐加能利紅色附石生

南宮山美濃国ノ一宮ナリ

初宮山梅のまきね
 風や貯けき梅の面
 南宮山梅のまきね
 梅の葉のまきね
 梅の葉の隙くまぬるまきね
 梅の葉のまきね
 梅の葉の隙くまぬるまきね
 梅の葉のまきね
 梅の葉の隙くまぬるまきね

梅舟
 八桑
 梅舟
 梅舟
 梅舟
 梅舟
 梅舟
 梅舟
 梅舟

夫木集二ひらり時を令り
何よりちりきまし海の時も
次やとらり 顯昭法師

柳の橋のころ

小舟何れも隣のの白の枝やこね

珍岐

大根引とらりさう漢

新土重り少切とこきやち根引

芭蕉

餅をきとれり只ふ寂ろ大根引

珍岐

神送り 煮くくる 雪の土大根

西堂

さうを頼下の五文字よまきそ

ん登りのお母さるさうし何 赤

那波

このはく先換様もさうさうぬ

赤城

落着きやよ 及びものも好まよまき

利年

思もともあつてそりそり冬の日

我眉

魚店や越えちとそを女白

里东

右のりり海川の庵くおとれ

一は他園ようの状のちりまら

つをそんてた 室よあしぬ

音

初雪の隣をさうそきり 一たり

珍岐

初雪のつらりや馬の鼻をしら

利年

初雪や峠の崩れつきのころ

貫山

雪のりよ屋かきくそみそさるぬ

依

雪のりや屋やうくさる雪の

猿野

新吉全約とて神くちまふ
ふかけよまふ 佐野のやらの
雪のうくれ 定家

冬の夜飯をきく

杉のまの雪鏡の枝の影	支考
牛の糞や佐野く渡りの雪の約	小枝
まの雪ねきさるる雪うらみ	許六
茶室の横たをるる雪の舟	湖夕
海山の雪の雪吹く風	乙卯
江の船や曲突まよるる雪の雪	嘉祐
題不知	
あまのまの物よおむむ枝野	羽黒主人 昌丸
まの雪や粉雪のかく雪の雪	芭蕉
禪門の草は雪あらし十枝	許六

白魚コニハ冬、李ニ出甲子紀行
冬ノ部ナリ即興感佩ニ任スニ
ヤ

白魚の白き白ひや杉の箸	之道
櫛の火や曉うらみの五丈尺	大子
唐申やこころ火爐のたるる雪	粥出
誰と寝る跡は雪を里外一色	雪角
雪つらるる雪やしきよ波の雪	雪
煤掃の雪く網つる大工の雪	芭蕉
雪の掃 掃多たまくい子代	万平
解掃や雪後をきく雪の雪	野坡
山伏の足さるる雪をきく雪	嵐香

九述老懐宗長分
同くうのこ老ぬれハ燃うを
こまき

瀨考カ
氣榮こし

冬ノ時ノ山ノ色ハ
白雲ニニハ冬ノ木ニ出甲ノ葉

竹生如氷ノ浦ノ暮人何々

早暮

はるもやまのりりアおま

袴足ぬ知身ハもア

あーアをそを一羽と

綿ふりのけつ

年一の松のま

年の暮

芭蕉下りの文

も

瓜をて心

結句

杉林

唐由

智月

孤屋

猿鈴

理坡

志

志

志

新年よまア

新暮

秋之部

秋の空屋上の杉を離れ

其角

おくれく一羽海

孤屋

新暮よ日

全

月のかく

全

祖父の

全

つゝ

全

下京

全

城

角

杜牧詩三南山与秋色氣勢兩
相高
尾上山頂ヲ云々人而有ノ
約ナリ五元集ニ杉をト

...

負於借字ナリ

より平の穢物ナリ

人のもの最に平の志こそ
もはや海も十中の一なり
より平の穢は火桶に火を
むくひの山言誰も火桶に
買ひて米を身辨多し
御りりきくてもさうく
此友の集はさうく秋の
杉の本末は月かきく
向一りり老の心も下くと
を平の志はさうく新部
よひやうな我もよきを

牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡

正真而有ハシテカク約ク
川正真公正直ニ同シ又古集并
正真是カト云リ諸説紛然

富田山城宇治川際ナリ

去るより人これハ何のぬ商
性もも肩よりぬき
京ハ物も家も
焼物も此名も富田
海を渡るも此も
駿河ハ雪も思案も
先沖もハ入中も入舟
内より葉も此も此も
ちも此も此のぬき

牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡

神皇正統記

割木ハ新云

冬の道一をき

元和頃柳灯籠ニ紙ヲ粘ニテ用

肩壁

元板はうニ彫損スモツク

鐵鬼ハ島ノ異形ヲ云リ

平一ハ櫻間ナリ

振素の原阿の水之えの嘉海
際ハヤクニ時多き新
中野西子櫃の少島を引く福
行をけりよ自をかゝるう
ぬ物の餅を多やをぬ能の
割木のやをきよのや
細のりのをつきやをかけ
星さくんとる氏二十ハ日
ぬるるきハ新の軍のた
泡子のやハ新の軍のた
ぬるるきハ新の軍のた

七十五
芭蕉
中野
西子
利平
坂
牛
屋
坡
益
屋
牛
益
坡
屋

肩壁ハ新云
とおこの平葉をきむうの
るよせぬりや内て意ま
好実のちりりをきつね
堀よのちりる五十石
は急の鐵鬼ハ島ノ異形
砂よぬるこのうらるる
新島の藁よをきつる
吹よふれるる葉よふ
川越一の平一のやをき
平地の寺ハ新をき

牛
坡
益
屋
牛
益
坡
屋
平
坡
益
屋

干把を日向のけしあきとて
塩出ん野の節本とくちり
兼用し海をさるる末住居
又沙汰をしまむすめ 産
とくくこと大海も四つ鐘
堂等の右のむ状の流さき
中よとて傍守右の借り
壁をくくおておきぬり
風止こく秋の晴の庭さかり
鯉の鳴きの響をいへん系
ちんちんと米の物場のけり

牛 野 坡 牛 野 坡 牛 野 坡 牛

諾ハ答ナリ

鯉ノ鈴繩ナリ

洞炭輪炭方炭茶人ノ謂ト
コロナリ 四名ノ引畧

熊谷ハ仲仙乃中ノ一駅ナリ

目蓮さまの連め流ちとや
とくもかもむのち月申一
福居のちりき拂ふ去り
雪のねをれ口んはあき
りのけりあのおきふ申空
下着をつ丹波よおめり
おゆくとまもく大急の佐
才あけらるるゆきやく
粟をかき積り度ま相地
熊谷の堤きれる秋の水

杉野 牛 野 坡 牛 野 坡 牛 野 坡 牛
松野 子冊 利牛 岱水

稿子子のまゝハ稿株茂止之
中國西國トモニ分限者ヲ手
前者ト云

際付ニテ汚レキ
入ラスルナリ

昔よりして輕節、賣る
二三を原にあらふ門の御
るのき物のきり、干りの
竹の皮を流さるる友のきり
編よりのきり、るのきり、
子前者のいり、もるぬ浦の秋
きり、り、り、り、り、り、り、
きり、り、り、り、り、り、り、
皆中一のり、り、り、り、り、
葉道のきり、り、り、り、り、
川より、り、り、り、り、り、

冊 坡 水園 石葉 松竹 披 利合 依 葉 珊 臨

雪舟名、茅揚雲谷寺ニ住ス
入大明帰朝後永正二年寂

物あり、り、り、り、り、り、
取集めて、り、り、り、り、
餅本を、り、り、り、り、
り、り、り、り、り、り、
雪舟、り、り、り、り、
隣、り、り、り、り、
又、り、り、り、り、
換、り、り、り、り、
大坂の人、り、り、り、り、

水 屋 良 隣 依 園 冊 半 合

オコ
氏前ハ一向宗ニテ佛壇ヲ云
唾ニ寢テ

選草餅ノ用意ヲ云
十三名ノ白引畧

酒をよむれハ、祖母の命を子入
すけぬるは、おの命のまけかり
次のお影をくつゝも、おの命
おの命よかみて、おの命を
おの命の、おの命を、おの命
おの命、おの命、おの命、おの命
男、おの命、おの命、おの命、おの命

水 御 也 本 冊 披

撰者芭蕉門人

志老氏

小泉氏

池田氏

野 坡
孤 屋
利 牛

元禄七歳次甲戌

六月廿八日

賣表上表

良文集ニ北風利如
京三羽云廣沢の池ノ向ト又黒
谷ヨリ鹿谷谷(出道)モ同

長持小少降の仲百多
くらくらと云々の晴る言
静きふ一口阿そふ砂の
轡の痛のそてぬ 母 穴
滑出の牛不遠をそく
をぬぬぬをかく内内
内法は傍撃虎のくち
籬の多あお名系き
むはそそあて粟も板もむく
は借るくく 竹の 日き
割 せくよき坂のそく

里 蕨 沽 里 蕨 沽 蕨 里 蕨 沽

嬋娟ナリ静ナカ
伊カ

小雀山雀日雀四十雀五十雀
云リ

多くとハ鳴ル事ナ

すくすく小早のくおれか
引きそそ理まきさ
そのと火入ふ 蕨 草
もくもくや ぬまの
水 ぬか
雀の字や掃くく 渡る
さうさの舞のわらき
立あきを ぬまの
ふらふらと ぬまの
雲を ぬまの

馬 蕨
沽 蕨 里 蕨 沽 蕨 里 蕨 沽

いさみまの白菊の吟ニ歌
同葉五里園ニ与ヘ玉フニヤ
草枯雁鳥眼疾

卑下して産まふ料理くま
此乃て秋をなする舊の月
影をあらわす玉露の光
伏巻を響の母の阿と曰く
るけりし出羽の庄内
土の志はく時多しの苦ひを
吹て氣味よき杉苗の冬
木のかけ葉をもち雛子の首の
阿と曰く土の如く論矣

いさみまの白菊の吟ニ歌

里園

里 沽 苑 里 沽 苑 里 沽 苑

垣ノ柱ノ霜ニ凍テ嵐ニ飛ニヤ
又 薔 薔 トモ
節 榑 カ

元板改より一本頃より

智恩院、京都東山浄土宗
本寺ナリ

そのうちさきの雲をうすく
大根のまきぬきまきとれ
以下ともは能楽の玉秋
阿知小舟たのびの阿つめ御
若うちうちとて
智恩院の響りの竹根りて
さきの後に根りやく
畑の響き水をかけ流し
目利て家いよるまきし
杖筆を踏海の島脚清きて
まきしよるまきし日の新

沽 園 芭 蕉 馬 寛 沽 里 苑 沽 里 苑 沽 里 苑

和州平群郡

柴舟の只也ニ通フ

一本漬ニ作ル元板古集弁トモ
吉賣ニ作ル

俗線中古ノ俗字ナリ俗孫娘
ノ転誤カ一葉集ニ増ニ誤ル

草の葉ふらふらふの如く渡ちをり
何約葉きふ孫とりしるも
くき松ハ贈をりけき渡りる
耳の言うり明をりるそり
柴舟の葉の中よりはつとて
板の傍つ門をりてりり
百姓よちうて昔も昔も
くまのを孫ふあふり
まおの渡りてこあろり
りりの若さいそりりもせぬ
れをりて孫の中り孫の葉

葛 里 沽 葛 里 沽 葛 里 沽 葛 里 沽

何今仰山ナリ古言只希
有ナリ

不猫蛇ニ此花ノ白支考カ窟
入ノ趣ニ云リ

別も人ら云 出をり 位
火槍の出しけり孫も我とるやを
一石やうり 確 の 木
おろりハ実目の如く天をま
何よ加減の味ふおろり
月かけよあ 相手を吸てん
おまひのやうに早始て松葉
子掃ふ娘をやめて娘のさく
葉をの葉をとりて仕ま
ちの阿とつたの方におまら
寺のいけり 山陰の春

葛 里 沽 葛 里 沽 葛 里 沽 葛 里 沽

そらういふうぬらし此の略
一由降て阿くくく水

沽圃

考

支考

惟然

考

考

考

考

續猿蓑ノ題号十六此巻此集
の巻首ニ出スニト諸説ニハ
無住法師ノ雜談集ニ載ル
アコトニクナクハスエヤハ
猿ニヒケテマタノカクハ
ハ

登春古雜ナリ

藤竹よりまほまほのくくく
船の阿うるとやうな船の内
通りのあをふんぬくくる秋
魚志のまひ一とらてまきる船の魚
魚の海の海をまきりりゆたり

是言トモセカ

是言他季移リニ人句ツ
ケリ

三井寺ハ紀州名草郡ニアリ此
江彼岸ヨリ早ク花サト云リ

一本ニあくは誤ル

解年々なると言ふまはるお語
中國よりの状の吉 左 右
細口の甲のまよとよら振舞れ
一重羽織りまてとらぬる
まはるまはるまはるの 楓 楓
山門 阿る 阿るの 舟
初めいふ島の人のかげまはる
まはるまはる 深の 小 鱈
石てくる 紀之井ハむの暖かり
若枯のまはるまはる 日
らちたの又いふまはる北まはる

然 考 然 考 然 考 然 考 然 考

大節なり、兩親ノ命日ナリ

系も不^三跡をたずか^三り
後^三の内^三義^三は^三度^三を^三教^三か^三
唯^三海^三の^三さ^三も^三む^三を^三さ^三り^三経^三ぬ
た^三せ^三つ^三を^三白^三り^三言^三る^三若^三の^三心^三
雪^三か^三き^三ら^三し^三中^三の^三派^三を^三
た^三る^三程^三の^三糸^三掛^三は^三皆^三出^三家^三前^三
更^三の^三世^三道^三は^三也^三年^三の^三作^三
海^三より^三も^三春^三の^三や^三を^三き^三自^三足^三して^三
布^三鶴^三既^三を^三た^三る^三の^三正^三面^三
空^三に^三ぬ^三娘^三の^三さ^三ら^三り^三土^三の^三め^三
在^三汗^三の^三と^三す^三る^三を^三た^三る^三の^三夢^三

考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

大節なり、鑿^三鋸^三ホ^三音^三ナリ

賦^三鋪^三陳^三ナリ

林^三大^三詩^三合^三入^三蒙^三賦^三不^三殊^三

を^三心^三を^三つ^三り^三と^三を^三を^三の^三知^三
大^三之^三を^三の^三又^三よ^三す^三ゆ^三る^三
宋^三撫^三も^三ら^三り^三を^三ぬ^三る^三
く^三ら^三身^三で^三布^三の^三中^三を^三押^三は^三ふ^三
は^三阿^三ら^三う^三汝^三生^三は^三む^三の^三け^三も^三な^三る^三
略^三の^三阿^三ら^三う^三の^三さ^三ら^三り^三ぬ^三夫^三
今^三宵^三紙^三 野^三盤^三子^三
支^三考^三
今^三宵^三は^三六^三月^三十^三日^三の^三さ^三ら^三り^三ぬ^三夫^三

杜律明年此會知誰健

奥義抄 湖光

しんまはるるは 歳年をうつり
しかりし人のまじきとまじき
おぼれとおぼれしものまじり
まじりておぼれぬ物もあはれ
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて

昔且 仮初ナリ

漫

桃李園序 罰依金谷酒數

何時

はるるの奥 密何まはるる
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて

昔

曲

外

昔

昔

昔

昔

天文志ニ鷲高飛而定天氣
又昏ヨリ前ニ啼八日和昏ヨリ
後ニ鳴ハ降ト云

茗若又鷲

つらふ石より石をちてそり
飯糰なる酒桶をむちお経
も習て工ををししる照降
お経るる石より石をちて
お佛のちりより石をちて
平野の草をちりしる石を
お経るる石より石をちて
つらふ石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて

高 翠 高 然 考 翠 高 然 考 翠 高

天和

晦日前ニ俗ニ際ト云

お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて
お経るる石より石をちて

高 翠 高 然 考 翠 高 然 考 翠 高

瓜をもち碓のやうなれよ思ひ生くる

又

酒酌即ち琴の音せよ寝のこゑ
 物よりして降出さぬまゝの枝
 人の集もかく寂りしるまゝ
 思ふ口や嗚呼のちの北面
 七のうらむあはれ女中
 又ささるるおのふはや初まゝ
 嘆息をわづらひける志未成
 家たやあつたる重んじり
 二の指やささふ吹込鯛の鼻
 惟然
 支考
 沽漁
 猿雅
 功和
 己歌
 本節
 沾前
 子珊

興

葉出のさかよふくまふふ

田家

蕩翁の名おとせん山を
 嘆くもや飯米五千一石
 少くは花ものり木のやどり
 ちうき木の根やたふさむの
 ち筆をよめておん人の海
 とれやうまき麻走んちの表
 めうおん壁の志ありや軒の
 一かへむえのほそや旦那寺
 ハきささるるあまうらな良業

卓袋
 一袋
 其角
 卓袋
 沾園

三葉三草

如名香觸ケニ

蘆蒿ロウカウ又鶏兒腸トモ俗ニ云娘菜ナニ

そらりとも 萌らむ母語や春の子
あまやねまけつき 櫛のりそ
春の霞やしのれのみろかきらん
川澄や泡をよまむも 芦の角
宵うるもよや草のむらり
知のや梅のふりしあうたき
ほろも 咲ほふものも 鬼あそび
堤よりこらぬるれいまふれうの
踏踏く土堤より 月夜露のたう
あゝ 傷れぬをさく 木たれ

正秀
成翁
尾紅
猿籠
雲指
車来
蕙雀
馬寛
拙依
乃就

山城守治郡

千代田八封土、内田云
くぬハ海ナリ早ねク

早蕨や春より ぬの 梅よりり
味清 朝露の白ひし 経る之 春の
わが けし 梅の 枝 ぬの 梅 芽 生
蒲の 葉 や 春より ぬの 梅 芽 生
猫恋 附 胡蝶
あかじや ぬの 梅 芽 生 梅の 恋
うき 春より ぬの 梅 芽 生 梅の 恋
思ひの 梅 芽 生 ぬの 梅 芽 生
ぬの 梅 芽 生 ぬの 梅 芽 生
ぬの 梅 芽 生 ぬの 梅 芽 生
ぬの 梅 芽 生 ぬの 梅 芽 生
ぬの 梅 芽 生 ぬの 梅 芽 生

正秀
夕可
一桐
園落
梅恋
支考
巴百
梅恋
梅恋
梅恋

楸の幹はくさくさして

管指

凡そくさくさして少く

管指

をたててくさくさして

管指

去原

折るくさくさして

沢産

去原

州産のくさくさして

本産

苗れくさくさして

此産

子川の田舎くさくさして

一産

楸附楸

白楸や黒楸も

楸隣

良文集楸花水色渾り

千利ノ田八住吉ノ所田ヲ云

妙福ハ冥福ニヤ又妙福ノ守トモ云
とまハカノ書換ニテ丘カ

桃ヲ脇狂言ニ比論セシナリ

阿弥陀經ニ彼佛光明無量照十方
國無所障礙トアリ
蓮如上人傳ニ小服綿ヲ常ニ石
玉トアリ

金柑はくさくさして

何産

伏見のと某種のと

電芝

楸はくさくさして

水産

若くは楸や

其産

江戸の栗田く

まわりのく

のまわりのく

少振楸はくさくさして

角上

種はくさくさして

此産

取はくさくさして

洞産

ちく楸はくさくさして

此産

秋冬ト古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

秋冬附躑躅藤

山や煙る干しる義しとく 雲指

田家の人を對して

山吹もちるる茶の蘗をちん 酒堂

堀おとそつしの株や蝶のより 雪芝

菽野や種まきとく藤のま 荊口

春月

山の端をちるる月と春の月 魯回

春の月附春雪性

おとそつしの序とちんちんちん 荊口

おとそつしの合たりと春のる 乃就

鴨鶏

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

春の月と古来ヨリ用未トリ
七重八重むいさゆともいふの
このいふつちんちんちんちんちん

友誼やあまのあはれをてそく

拙儀

とを御免の旨

あらつやいふもねももきり

法圃

夕影や結ぐ糸はんあまの穴

芭蕉

夕影や裸て起てあまの

芭蕉

薄の衣はちくさるる

芭蕉

蘭の香はひらひら水鏡に

芭蕉

昔のそよ風やこころもはる水鏡に

芭蕉

あはれやせむさむしの根おとし

芭蕉

瓜

朝露よりとれり瓜の土

芭蕉

及日記三双帝山の流下り

那瓜や神よ乃をもそく

玉曉

牡丹

露あふくははるる牡丹

芭蕉

早苗

春入やあまの田植のゆり

卯七

甲乙やまはるるやまの細

芭蕉

ゆきゆきの梅はるる早苗

芭蕉

田植くはるる早苗

芭蕉

一田つゆあまのや水のあま

芭蕉

里のそよ風はるる早苗

芭蕉

芭蕉

まふ抄三知七日先師述化のま
年一巻をまふしゆり時のゆき
とつよまふるる早苗
つよまふるる早苗

真手先良

三才函會ニ無花根ハ一月而熟ニ
故多假名ニユクナヤク非ナ

和名抄ニ鯉性沉伏而在石間者

故きり大の輪をさする所

許六

沈深

すくすく水に揺る所

半鏡

せき果や産産まむりり

性然

源川の底をさす

せき果や産産まむりり

史邦

源一とや加る所をさす

重翠

石山や裏の底をさす

杜身

さくさく牛の尾をさす

万牛

源奥三句

源一とや加る所をさす
生破を福らむる所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす
源一とや加る所をさす

源奥
支那
重翠
杜身
万牛
許六
半鏡
性然
史邦
重翠
杜身
万牛

りるや 草の葉多く池の岸
又まやららら 竹の皮
いっさうな年かゝるやまの町
圃水
曉鳥

蝉
らるや中庭りして 柳の聲
きつと身そめてをり 柳の葉
森の柳 柳の葉やちりて
柳をくちを 織るや 葉の
夕鳥

難夏
霧の目や 池のほとり
素松

空を 雲の動止むらり
虫のくさ 夏菜とや ちの細
夜も 霧の中 しのび
如去

川村よ
あう 焼やまのくさ 柳の葉
課をみよ ちのくさ 柳の葉
夕鳥 柳の葉も ちのくさ
水鳥

魚のくさ 柳の葉も ちのくさ
柳のくさ 柳の葉も ちのくさ
馬苑
草

酒席
飯糰
三作ル

老杜唯雲水のこぼ縮穢空
雲水川平對石門ノ誤リ也

古今に秋の暮と月を柱りて
やちる光を花とてん
とらよ

東坡詩「春宵一刻直千金花
有清香月有陰

雲水のこぼるうとくくまらぬ
きりりその水の跡をけい言
葉を舞うて心も花もなかり
たりのこのむすの命は使はる月
のくまのこぼるるはれをむと
ちんれ斗みとおもひやとまれば
あは清き花の月を陰ありて
きも清き花の月を陰ありて
前ハ秋實をむすもはは風無
きもつたはるる花もなかり
きもつたはるる花もなかり

田蓑島、撰局

闘評

名月のほよりなほ田蓑島
名月や西よかれに秋風の月
ものこの心ねともし月を成
あつたはるる花もなかり
名月や花のかけを人の心
名月や花のかけを人の心
名月や花のかけを人の心
中切の葉よと葉のつく月を成

酒事
め約
高法
名月
雲指
源系
不玉
配力

きんのかみ^{モリ}候^{モリ}松^{モリ}り

聯^{ヒラタ}小舟薄ニテ長きまきり

田原長太郎

名月や雪のふりそよふを	友松
名月や雪のふりそよふを	圃水
おむきもぬるそよふの月	山樗
名月や雪のふりそよふの月	尽國
名月や雪のふりそよふの月	雲笑
名月や雪のふりそよふの月	重方
名月や雪のふりそよふの月	沈荷
名月や雪のふりそよふの月	支考
名月や雪のふりそよふの月	立成

古歌 夏いふそよふの月
山雪のかりそよふの月
り

三老女 娘捨檜垣関寺

柳の名のふりそよふの月	如雪
山雪のかりそよふの月	宗比
名月や雪のふりそよふの月	木枝
名月や雪のふりそよふの月	利杏
名月や雪のふりそよふの月	丹楓
名月や雪のふりそよふの月	理菖
名月や雪のふりそよふの月	正壽
名月や雪のふりそよふの月	丈草
名月や雪のふりそよふの月	景柳

沾圃、寶生左太夫

に父の如く秘して法を傳へ
をのりひ出り

姨撫を言ふの如く也にやの月 沾圃

夜まで月入ちや堀の白根 馬苑

草わらふ月やさくさくぬ指の如 里奈

月影は海の音や木を影に下 牧童

海川の末を本ねの如くはるを

さしそ

川と此川下や月の友 芭蕉

十とねらうらうあまのこゝろは 猿

いそよのいそよのなまけり 猿蓑の玉 猿籠

川上葛飾の素堂ヲ思ヒ玉
フニヤ

神中集 薰姫 支七姫之名

セク

女形やみ田の上のそりの川 時然

皇女とてあやうたれぬ鳥 原業

船形のそよよのやまの影 東漸

女をもとめいふれりけり 沾圃

朝風や 薰姫の 志 乙羽

立秋

一葉のや 夜をこよよの秋 香川

秋まや 申さぬらう 乙羽

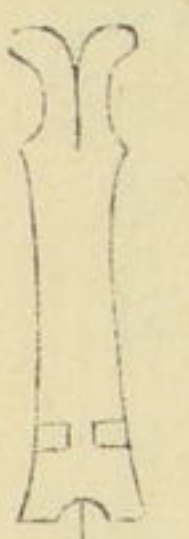
秋子

朝露のちを 遠くを 松極 杉梅

調ニテ年ノ多ククル云

越中婦員郡鶴坂ノ社ニテ夕
男持タル杖ニテ打ナリ

弓固ノ圖



此所草ナリ

少子花ニ屬シ花ヲ云
ハ文庫ニハ云々ナリ

史邦々自撰證トスニ

杖草紙ニ一ノ一ノの云々
けや死の云々云々

御子ノ云々
 女ノ云々
 一ノ云々
 弓固ノ云々
 贈芭蕉庵
 石名ノ云々
 昔ノ云々
 枯ノ云々
 修良ノ云々
 修良ノ云々

瑞友
 湯子
 馬鹿
 鳥栗
 支派
 風麦
 史邦
 万平
 芭蕉
 至曉

去来抄ニかくのめく云々
云々云々

其角カ句野ニ菊ノ下
書撰正ニテ再入ニヤ

悦目抄ニ云々
云々云々

おくや白くさるる若の翁
 昔の葉や秋の風
 山人の空を志すれ若くは
 風毎に流るる若くは
 若の翁
 若の翁の答は心若くは
 若の翁の遠くは柳の風
 水もあつた若くは
 若の翁の若くは
 虫附鳥
 若の翁の若くは

若号
 松妖
 松下
 田上尼
 若指
 風麦
 其角
 女
 可南

基俊

富馬ハ両名物リ

蟾螂やとりて傍に下加筆

富馬や意を花つく袋 桐 小枝
 火の流て湖よりうらやまの意 正彦
 秋の夜や夢と射をきりくけ 水崎
 義信や形よ似合し月の新 杜若
 秋の夜や何の味ある草一の皮 採丸
 蟾螂の夜を冷をこの石の上 若草
 昔のころは新をくくせん 示草
 水戸かゝるは並いそる 犬学
 春の夜やゆらぐ浦の管を吹 馬鹿
 若鶴やきりくくく白川 氷固
 栗の種をくくく時や吹 文考

おのころよつふをむねあり
 とくよおのころけききり
 少将尼ノ歌の余情を葉シモ
 ト入日記ニアリ

かぐ風聲ニテをらめーカ

稲の夜ハ稲妻ニ同

老のあつたつともくくく四十夜 芭蕉
 秋風や二葉燈をの移させ時 源ハ
 夜多の聲もまを秋の風 式之
 けをくくくくくく秋の夜 文考
 ねの葉や細きくくく秋の夜 風因
 古のくくくくくくく秋の夜 圃燕
 ふんをくくくくくくく秋の夜 九節
 ちれくくくくくくく秋の夜 猿鶴
 稲妻
 稲の夜
 少年
 一東

電光石火の間ニ無明ノ闇迷フ
世態ノ観想ナシ

此句ニ伊勢斗從ト山家トと云々
ト云々アリ墨を故省之
へんうくとトト忘梅集其外
付ト文字ニアリ付キヤ

猶書やそとて海の
向ふも給書あやそ
いふもや言ふ方は
木実 附 菌

志業のそとて石を
炭焼の溜粉もむ使
秋平や口和くは
法フのそとて板のそと

初草や塩もは
海客のそとて阿婆のそと

法園

法園

此句ニ伊勢斗從ト山家トと云々
ト云々アリ墨を故省之
へんうくとトト忘梅集其外
付ト文字ニアリ付キヤ

畑ヲヨシ作人ナリ

松茸やそとて山の
中草やそとて木

楓

後庭の堀もそとて
鹿

尻を向ふ松のそとて
鹿

鹿

畑

畑

畑

穀ハ俗字カ

五六十海老つらひりて穀一ツ
 粟一ツの少家作らんねのり
 阿多鷹の登るちつつくおき
 跡る故や馬を向出る秋のる
 身少くはるさるのさる細ウカ春
 更る夜や稲こくおのさるお
 柿のさるは味味味さるる
 本馬さるのさる穀骨せの笛鼓
 さるかして能さるるをさる許巻
 の登るさるる種よさるのさるる

之送 鳥友 睡止 里友 藤子 万手 宇波

万葉集よりこれハ俗字カ
 主馬名丹野大津住能太奉り

注子至樂葛三授觸睡枕而卧
 ト云云

東坡カ九想ノ國ヲ思フキカ

これハ希求す

今もいふきりさるるさるるさるる
 韻語と枕とて終るさるるつ
 さるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるる
 時雨附霜
 この頃の地の結目や幼時百
 志くれ終るさるるね風のさるる
 さるる人さるるさるるさるる

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

顔

楚王園鏡中雨

一時も又くらくく口新外
 初時も小端の草の葉加減
 平押又五反田くも時る外
 葉もやつく時るの葉はく
 梔子もくも芳の知時面
 水然の生てハ引込時る外
 文も葉や鏡よりくくく外
 石もくも香煙をぬく時る外
 柿もくも口もくもく時る外
 高もくもく時る外
 海もくもく時る外

露沾
 馬克
 理水
 雲指
 空牙
 為有
 勢ハ
 理秋
 香川
 里圃

沖西風ノ名ナリ

原本辛酉ハ誤ナリ元禄四年辛未
同六年癸酉ナリ勺選年考ニ元
禄六年トイフ

東坡侍題ニ菊花開時則重陽
展ナリ大骨ノ御代重陽延喜
帝ノ御田忌ニ當セ玉フニヨリ十月
殘菊ノ宴ヲ行セ玉フ

日新くくくくくくくくく
 沖西の風もくくくくくく
 初時も大の草の葉加減
 平押又五反田くも時る外
 葉もやつく時るの葉はく
 元禄辛酉ハ初冬九日葉盛
 為園くく
 手もくもく時る外
 けりもくもく時る外
 木もくもく時る外
 石もくもく時る外
 高もくもく時る外

派圃
 如鯢
 支考

菊を好む一人くさきものね

芭蕉

菊の香や庭をゆく履の底

其角

柳の色や花をゆく菊の香

柳隣

いづれもやあつまる菊の露

浜園

いづれもやあつまる菊の枝

其良

菊の香や庭をゆく菊の枝

其寛

崇禎、薄陽縣ニテ陶淵明カ隠
栖ノ地ナリ

菊の香や庭をゆく菊の枝

崇禎の隠士無銘の巻を説く

ありや菊の香や庭をゆく菊の枝

ありや菊の香や庭をゆく菊の枝

竹洞老人名節一守友元林道春
門人ナリ

今その名をよむひておろそ

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

あつまる菊の香や庭をゆく菊の枝

水園

其角

長男ニテ趙南八書撰ナリ史記
越世家ニ出
山家集於やも命をたつる人
いんしんのくくもてこつて
たす

水何のあのみそれや
惟然

山家集の歌うたよ

一書もくろきぬ
道彦

ウミをいへより
車庸

ウミをいへより
土茂

木葉 附 冬枯 風

おもひのう
治徳

早もてて
霞石

冬川や木の足
惟然

木葉のうら
松風

木葉のうら
一過

木葉のうら
杉葉

木葉のうら
柳破

木葉のうら
乃新

木葉のうら
利牛

木葉のうら
支彦

木葉のうら
智自

木葉のうら
風林

木葉のうら
惟然

牛の順風ヲ恐レ逆風ヲ悦クト云

牛の順風ヲ恐レ逆風ヲ悦クト云

敗布

源頼朝の遺言云々

柏堂昌元元禄六年二月三日密表
于京師

天鵝毛のさくらさくらして年々
源頼朝の遺言云々

性然

はるの園司昌元羽衣より

のちとして浮世より

はるの園司昌元羽衣より

はるの園司昌元羽衣より

源頼朝の遺言云々

性然

源頼朝の遺言云々

性然

源頼朝の遺言云々

性然

源頼朝の遺言云々

性然

源頼朝の遺言云々

性然

源頼朝の遺言云々

性然

衣配源氏玉衣の巻
民間の奴婢十二ある仕着
なり

織居ハ其のさくらさくらして年々

性然

雑考

小屏風の茶を扱うる

性然

桂竹の風を

性然

井の水の

性然

室の

性然

雲の

性然

山陰の

性然

娘板の

性然

和名抄ニ組ノ一字ヲ用

和名抄ニ組ノ一字ヲ用

性然

釋教之部 附 追善 哀傷 杉風

涅槃 泣圃

涅槃像 表身も同じく多し 甚急

山に手 杉風 不撤

多福のまゝに 誠志も 涅槃像 山持

流佛 曲翠

流佛やアア 並ぶ 井石の石松 石玉

流佛や 新迦と提婆 涅槃像 之乃

流佛や 新迦と提婆 涅槃像 之乃

流佛や 新迦と提婆 涅槃像 之乃

流佛や 新迦と提婆 涅槃像 之乃

鬼祭

喰も皆水こそ 魂まらり 嵐さ

山伏や 坊主を 鬼祭 玄来

甲戌の夜 大津の 鬼祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

かしの 白く 魂祭 沾圃

元禄七年甲戌 凡

悼少年 二句 怪然

此寺ニ上入刑ニ着ニ時ノ表草石
今存セリ

オマイ
法教講ヲ俗ニ命講ニ作ル

臘月日釈尊今曉明星ヲ見テ
成道ニ玉ニ旦リ

大師講ハ土月廿四日天台宗祖智
者大師ノ忌日ナリ

その親をまつぬをまひぬのゆ
加ふくらの語はまな語
支考

首の座ハ福妻のまなを討り
本宮
墓系や福妻の座も柿の水
支梁

法教講
柿も拜経もつり法教講
沾圃

臘ハ
勝をさくろくをえれぬ互にけ
許六

何の所れかのおれまは大師講
雑題
ぬ約

法華の書如書よりてまな支考

去來抄ニ再改て今の寫ニヤリ
添一さのトアリ

仏在世釈迦佛ノ在ニ世ニ云

夏念仏夏籠ノ自課ナリ

三ツ堂 庫裏ヲ云

如來開帳の時

添一とも聖のまなを
去來

何れも勝をまなを
智月

何れも細や散をまなを
乙羽

何れもまの川越をまなを
重慶

何れもまの川越をまなを
聖坡

何れもまの川越をまなを
支考

臨終部

送別

元禄七年の夏に在りての事

韻塞格のむのよらもも
本名の格うき人の格もな
本名の格うき人の格もな
カ悪衆思ふ

詩魏風碩鼠く無食我黍
三歳貫女莫我肯顧遊將去
以適彼樂土の轉
伊達衣常陸下向江戸と
時流りの人トアリ

身延山久遠寺日蓮宗本山ナ
リ

又直して

麦わりの餅屋の店ミセのふり
ふるや柿名取の坂の上
許る本名格もむむ時
旅人らとらもむむ柿の玉
留別
流の惟然りやまう志す時
流もむむ柿の玉とらむむ
鮎のふの白魚さるぬれ
甲斐のふははははははは
山辺ふかふか

留別

山辺ふかふか

山家集すこの山家集をよむ
りすくくくくくくくく

山家集すこの山家集をよむ
りすくくくくくくくく

谷地は漢國の地也
公羽の名マ、公羽二終
十國を往古の常ノ國子ノ大ナリ
ニ由ナリ公羽曰向土もアリト

湯セヌナリ

年よりて中より芳のり
綿衣の流世をさる終麻山
且もさるついで柿や旅の石
出羽の國よむむむむむむの
まむむむむむ

まむむむむむ

そのかみは谷地もさるし小松屋
十國もむむむむむむむむ
大名の名もさるむむむむむ

熊野路

くくくくくくくくくくく
燕ハオマカカカカカカカカ

猿野

我客
史邦

田園の心も漸く好男の

久春の心けけハ秋深

我布意いそく旅をさす春
治園

常陸國はあふれとふは

初瓜や及ふ秋ふ秋もそ

元禄二年の冬西栗津の冬庵
今

極る事々情や極る小豆粥
支考

初瓜や及ふ秋ふ秋もそ
今
元禄二年の冬西栗津の冬庵
今
初瓜や及ふ秋ふ秋もそ
今

西行上人二見浦ニテ菊ヲ文筆
トシテ詠歌ニシテ古事ニシ
カ

足洗村水戸ヨリ名古曾ニ至
間ニリ

正月十五日ニヤ此日粥ヲ祝フ和
漢ニリ

三年八四年 書損ナルシ
元禄三年ハ膳所ニテ越年ニ玉ヒ
初夏ヨリ石山ニ住庵ニ住玉ヒ
又湖南無名庵京師ニ苗杖ニ文
栗津ニモトリ同四年ノ初冬武
江ニ下リ玉フ
塚本孫兵衛名如舟ト云
泊船集ハミテ宿ニリニ作ルル
ハ詠カ
昔蕉談曰先師迂化の年伊賀
の連衆此国ニ一集なき残
念カクテ類ナヤサレ一討諸
終ハトクニ炭俵六月迄ニ成就
一終リ一旬後ハ二百ノ多クモ
巻トモカフニト云フニヤ
小集ニてもカクニト云

續猿蓑撰集半三前辻也
 至八日過半後人ノ聲入十リ元ヨリ
 草稿ノ書トシテ書損見エ手跡
 蓮ニ坊上ニ不猫蛇ニ公利ノ自撰
 ト悉片腹トキコト云云ト
 以返答ノ削然ニ又考曰親密
 撰ニ去来支草ヲ行ハル
 云ハ大九偽言ト云

續猿蓑撰集半三前辻也
 至八日過半後人ノ聲入十リ元ヨリ
 草稿ノ書トシテ書損見エ手跡
 蓮ニ坊上ニ不猫蛇ニ公利ノ自撰
 ト悉片腹トキコト云云ト
 以返答ノ削然ニ又考曰親密
 撰ニ去来支草ヲ行ハル
 云ハ大九偽言ト云



三森 幹雄

日本橋區蠣壳町三丁目
 四番地

小林 喜右衛門

同區新大阪町十番地

高木 和助

同區若松町廿一番地

